

WAYプロジェクト（校内道德教育推進委員会）レポート

2019・9/24（火）

須磨友が丘高校 授業（臨床哲学）見学の感想

レポート 鶴田

今回9月10日（火）、9月24日（火）の2日間にわたり、総合学科の授業の一環として「臨床哲学」の授業を実践されている兵庫県立須磨友が丘高校に授業見学に伺いました。『兵庫県立須磨友が丘高校の「臨床哲学」の授業で、対話を通してテツガクしています。テツガクするとは、見て、聞いて、自分で考えて、自分の言葉で話すことです。』とHPには書かれています。

まず、9月10日（火）にうかがった際は、講師で来られていた藍野大学の玉地先生が特別講師で授業をされました。玉地先生は脳梗塞患者の歩行体験装置を、臨床哲学の視点を通して開発をされています。今回の授業では「見てみぬふりをしてよいとき、ダメなとき」というテーマで話し合いがされました。見学に来ているおともも議論に参加し、対等な立場で学ぶことができたのではないかと感じます。大正中学校で行う予定の『哲学対話』では、集中HRを行い、自己開示のできる本校生徒ならではの、熱い対話ができるのではないかと考えます。そのためには『哲学対話』におけるファシリテーション技術の習得をめざしたいと思います。

続いて9月24日（火）には、向本校長、今度本校で哲学対話の授業をしていただくコミュニケーションエンジニア「イミカ」の原田さん、市P顧問の齋藤さん、松浦、鶴田の5名で伺いました。この日は元々「臨床哲学」の授業を受講している2名の生徒と、我々大人4名も参加させて頂き、共にテツガクしました。テーマは前回からの続きで「見て見ぬふりをするとということ」という問いから具体例と、その理由を紙に書きます。それを全員でまわして見て、コメントをします。その行為は理由も踏まえた上で「良いか」「悪いか」、「仕方のないこと」かで分けます。そしてその後に全員で意見を交わし討議をします。最後にそこから得られた新しい問い全員で考えました。例えば「わかるとはどういうことか」「めんどくさいとはどういうことか」「自分を犠牲にしてでも他者のために行動するべきか」などでした。これをもとに次回の授業でも討議をされるそうで

す。

「臨床哲学」を担当しておられ、カフェフィロのファシリテーターとしても活躍されている藤本先生から、哲学対話をする上での「問いの立て方（テーマ決め）」の大切な要素も教えて頂きました。①問いはできるだけシンプルに、短くする。こうすることで事例が出てきやすいそうです。②善悪（善いか悪いか）は問いの中に入れていない方がいい③なぜをつけると問いを作りやすい④抽象的・一般的な問いからはいる、こうすることで具体的な事例に広げやすいからだそうです。

藤本先生から話を伺うと、「臨床哲学」を受講する2名の生徒さんも1学期の当初は全然話せなくて、疑問点ばかりが残っていたそうですが、2学期にもなると、議論をすることにも慣れ、どんどん自分たちの口から言葉が出るようになってきたとのこと。やはり普段から考えるクセをつけ、それを人に伝えることで思考や表現力も鍛えられ、またさまざまな角度からものごとを考えることで、多面的・多角的にものごとを考えられるようになって感がられます。大正中学校で行われる予定の『哲学対話』でも同様に効果が期待されるのではないかと考えます。

（文責：鶴田）